

# プラトン『国家』—「知」と「不知」

岡 部 勉

プラトンは対話篇を書いた。それは、ソクラテスが哲学していたその形を、少くとも形の上では、そのまま写したということではないのか？ プラトンはそのように、ソクラテスを、そして哲学を、理解したのではなかったのか？ ——対話の中心には、常に「ソクラテス」（それは、「ソクラテス」、プラトンの理解したソクラテス、でなければならない）がいて、そのときどきの対話相手と向い合っている（多くの場合、数人の者がその周囲にいて、それを聞いている）。——この状況に於てのみ、「愛知（φιλοσοφία）」というそのことは可能なのだ、そうプラトンは理解したのではなかったのか？ \*

人はソクラテスを、無知を装い（εἰρωνεία）、自分の考えは少しも述べて、他人の考えを論駁する（ἐλεγχος）だけである、と見る。しかし、それは、第三者の目に映ったソクラテス像に過ぎないのだ\*\*。それに対して、「私は、そのことは知らないから、その通りに知らないと思っていても、また、そのことについて私の考えを述べることは、してはならないから、私はしない」——これが「ソクラテス」である。プラトンはそう理解した\*\*。

「論駁」ということについても、それをソクラテスの「方法」とするのは、「初期プラトン」のソクラテスについてさえ、正しくない。

ソクラテスは、対話相手の主張を「論駁」しているのでも、その否定を「論証」しているのでもない。仮に「論駁」や「論証」があるとしても、それは、対話相手の同意に基づくだけのものとしてあるに過ぎない。言い換えれば、「論駁」が成立するの、それによってその否定が「真である」

ということになるのも、すべては「同意した対話相手」にとって、そうだというだけのことなのだ。——「証人はただ一人」とは、まさにそのことを言うものである。

『ゴルギアス』472c2-6 で、ソクラテスは、「論駁」には二つのあり方(τρόπος)がある、多くの人々の考えるそれと自分の考えるそれとは違う、と言っている。そして、その違いについては、474a2-b1 で、前者は多数の証人を必要とするが、自分の場合には、その都度の話(λόγος)の証人となるのはその都度の対話相手ただ一人である、というそのことだけを行っている。——重要なのは、プラトン自身が、一般に人がそう言っている「論駁」とソクラテスの「論駁」とは違うということを、はっきりと告げているということ、そして、その違いは「証人はただ一人」というその点にあるということ、つまり、ソクラテスの場合には、対話相手がそうだと思って同意するかどうかというそのことだけが問題であるということ、この二つである。

ソクラテスの対話相手は、自分の思うところだけを口にするのでなければならぬ、そうでなければ、「吟味(εἰσέτασις)」というそのことが不可能になるのだ、と言われている\*<sup>1</sup>。——ソクラテスの対話相手は、それをそうだと思って、つまり、知っていると思って、同意するのだ。そして、その「知の思い」こそが、ソクラテスの「吟味」の標的なのである\*<sup>2</sup>。従って、もし、対話篇を読むわれわれが、ソクラテス＝プラトンもまたその思いを共有しているはずだ、いや、それどころか、それこそがソクラテス＝プラトンの主張なのだ、と(これまで人がそうして来たように)決めてかかるのであれば、その場合には、到底、ソクラテスの「吟味」——それをソクラテス＝プラトンは、即ち「哲学」である、としたのだ\*<sup>3</sup>——の跡を追うなどということは不可能となろう。

さて、『国家』VI巻18章 506d8-e5 でソクラテスは、「善そのものの何であるかというそのことは、今は語るまい、そうではなくて、その子供のこ

とを、私は語ろう (λέγειν εθέλω)」と言っている。私はここからはじめたい。——ソクラテスは、「善そのもの」については、今は語らない、と言っているのだ。それどころか、「それについては、自分の思いを述べることすら、今はしない」(cf. e1-3)、と言っているのだ。つまり、ソクラテスがこの後で、語ろうとして語っているのは、「善そのもの」についてではない、ということなのである。

しかし、その「子供」については、「父親」に最もよく似ている、と言われているのではないか (cf. e3-4)。それ故、ソクラテス＝プラトンは「子供」を通して、類比的に、「父親」について語ろうと言っているのだ。そう人は解して来た。だが、それは誤まりである。何故なら、子供について語ることは、それがどれ程父親に似ていようとも、父親について語ることではないからである。

それにしても、ソクラテスは現に「父親」について語っているではないか、そう人は言うであろう。しかし、そのことについてソクラテスは、Ⅶ巻3章 517b6 で、「それは私の願い (ἐλπὶς) でしかないのだ。そして、その願いとしての思い (cf. b7-8) を語らせているのは、対話相手のグラウコンなのだ」と、はっきり表明している\*。——願いとは何か？ 私は、私が、今はそうではない、私とは別の者になることを、願うことが出来る。いや、それどころか、今は、つまり、私が現にそうであるこのような者である限りでは、決してそうなることの出来ないような、そういう者になることを、願うことすら出来る。願いとはそういうものではないか？

そして、「善そのものを知る者」になることというのは、まさにそういうことではないか？

では、ソクラテスは何を、語ろうとして語っているのか？ それは、今ここで、即ち、私が現にそうであるこのような者である限りで、「知ること」と「思うこと」とは違う、というそのことである。

# 1. 476c2-d7

はじめに注意すべきは、『国家』V巻20章のこの箇所、ソクラテスは、「能力 (δύναμις)」としての「知」と「思い (δῆξα)」の区別について語っているのではない、ということである。そうではなくて、どのように生きているか、「目覚めて生きている (ὕπαρ ᾗν)」のか、それとも「夢見て生きている (ὄναρ ᾗν)」のか (cf. 476c4, d3)、その人は「知っている人」であるのか、それとも「思いのうちにあるだけの人」であるのか (cf. d5-6) という、人の「生き方」「あり方」としての「知」と「思い」の区別について語っているのだ\*。

これに対して、それに続くV巻の残りの部分では、確かに、「能力」としての「知」と「思い」が問題となっている。その「能力論」のモデルは、視覚や聴覚であり、そのことをプラトンは、はっきりと告げてもいる (cf. 477c1-5)。それは、この残りの部分の議論の、「前提」の一つなのだ (cf. 478e7 *τούτων δὲ ὑποκειμένων*)。そして、それを前提とするということの実質は、「各々の能力は、各々に固有の対象と仕事を持つ」 (cf. 477c9-d5) という、言わば「能力論」の「鋳型」とでも言うべきテーゼに、議論全体をはめこむということである。そこでこうなる。——(1)「知」と「思い」とは、各々「能力」であり、別の「能力」である (cf. 477b5-6, d7-478a2)\*。別の「能力」であれば、「対象」も別である (cf. 477b7-9, 478a3-5)。(2)ところで、「知」の対象は「あるもの (τὸ ὄν)」であり\*<sup>10</sup>、「無知」の対象は「あらぬもの (τὸ μὴ ὄν)」であるとする (cf. 476d9-477a5, 478a3-c9)、その中間にあるもの、「ありかつあらぬもの」を対象とするのは、「知」と「無知」の中間にあるものである (cf. 477a6-b2, 478e1-6)\*<sup>11</sup>。(3)「思い」は、「明確さ (σαφήνεια)」の点で、「知」と「無知」の中間にある (cf. 478c10-d12)。(4)さて、「この美しいもの」や「あの美しいもの」、つまり、「多くの美しいもの (τὰ πολλὰ καλὰ)」は、美

しくも醜くもあるもの、そのものでありかつあらぬもの、である (cf. 478e7-479d6)。それ故、「思い」の対象は、それら「多くの美しいもの」である (cf. 479d7-e6)。他方、「知」の対象は、常に同じそのものであるもの (*ἀεὶ κατὰ ταῦτὰ ὡσαύτως ὄντα*)、「イデア」、である (cf. e7-9)\*12。

「知」の対象が「イデア」である。知ることが「イデア」を知ることとしてある、というのは、どこまでも、以上のような「能力論」の枠の中でのことなのだ。そして、「イデアを愛する者」が、即ち「哲学者」である (cf. 480a11-13)。というのも、やはり同じことなのである。

だが、プラトンは、それだけを語っているのではない。

もう一度、476c2-d7 に戻ろう。この箇所は、明らかに、「能力論」の文脈とは別の文脈にある。何故なら、プラトンはここで、「美そのもの＝美のイデア」を見る＝知ることの出来る者が、「目覚めて生きている」者であると言っているのではない、からである。そうではなくて、「美そのもの」、つまり、「これは美しい」というときの「美しいということ」とは、「この美しいもの」や「あの美しいもの」のことではないとする人、両者を見分ける (cf. d1 *καθορᾶν*) ことの出来る人、そういう人は「目覚めて生きている」人だ、と言っているのだ。

これを、479e1-9 と比較して見れば、文脈の違いは、より一層鮮明になるであろう。ここでプラトンは、476c2-d7 を、「能力論」の文脈で言い直している。それによって、何が違ったか？ 何が付け加わって、何が抜け落ちたか？ 付け加わったのは、というよりはむしろ、そこで言われているのは、対象の違いというそのことだけである。抜け落ちたのは、*ὑπαρξῆν* と *ὄναρξῆν* ということ、つまり、「生き方」「あり方」の違いというそのことである。

以後、476c2-d7 の文脈を、「*ὑπαρξῆν* と *ὄναρξῆν* の文脈」と呼ぶことにしよう。それは、「能力論」のそれとは、完全に別である。どこかで一つになっているなどということは、断じてないのだ。それどころか、一

方の文脈は、「ソクラテス」を、その「知」と「不知」とを提示するものとしてあり、それに対して他方のそれは、まさに「吟味」の対象として、その正体を暴露されるべきものとして、あるのだ。そのことを、以下で明らかにしたい。

## 2. 508c4-d10

そこで、最初に、VI巻19章のこの箇所を取り上げることにする。この前後でソクラテスは、「視覚のアナロジー」を語っている。人はそれを、「善そのもの」の「知」と「知の対象」に対する、関係のアナロジーと解する。つまり、「太陽」の「視覚」と「視覚の対象」に対する関係がそれを示すものとして、ここで語られているのだと、そう解するのである。そして、確かに、そう告げられてもいる (cf. b13-c2)。だが、508c4-d10 及びそれと直接結び付くその前後の箇所は、そうではないのだ。

508c4-d10 でソクラテスは、先ず、夜の明りの下では、目はよく見えないので視力を失ったかのようなのだが、「太陽が照らしているもの」を見ているときには、よく見えるので視力を持っていることが分る、と言う (cf. c4-d3)。次に、そのようにして (cf. d4 οὕτω)、魂も、「真理 (ἀλήθεια τε καὶ τὸ ὄν) が照らしているもの」に向っているときには、そのときそれを知っている (ἐνόησέν τε καὶ ἔγνω αὐτό)、知性を持っていることが分るが、そうでないものに向っているときには\*13、ただ、あれこれ思いを巡らせているだけなので、知性を持っていないかのようなのである、と言っている。

対応しているのは、先ず、「目」と「魂 (ψυχή)」とであり、次に、「太陽」とそれが「照らしているもの」と、「真理」とそれが「照らしているもの」とである。そして、この「アナロジー」が、「知」と「思い」の違いについてのそれであることは、明白ではないか？ しかし、それは、「能力」としての「知」と「思い」についてのそれでは、断じてない。何故な

ら、この「視覚アナロジー」のポイントが、太陽によって、ものがよく見えているかそうでないか、というその違いにあることは、議論の余地のないところであって、しかもそれは、誰の目にも明らかのように、能力の違いを言うものでは、全くないからである\*14。——この箇所は、「能力論」の文脈にはないのだ。「魂」が主語であることも、そのことを示していると考えられる。

ソクラテスは、この箇所の直前で、先に言っていた「善の子供」とはこの「太陽」のことである、と言明している (cf. 508b12-13)。それ故、ソクラテスは、まさにこの「太陽」のことを語ろうとして語っているのだ。そして、この箇所が「*ὑπάρ ἔστιν* と *ὁὕαρ ἔστιν* の文脈」にあることは、明らかではないか？ 何故なら、全体として「魂」がどうあるか、というそのことを、この箇所は問題としているのだから。

では、その「太陽」は、何を表わしているのか？ 「真理 (*ἀλήθεια* τε καὶ τὸ ὄν)」を、である。そして、それは、「アナロジー」の示すところに従えば、「知」の「原因である」と同時に、それ自身も知られる、そういうものである、と言われている (cf. 508b9-10)\*15。だが、「原因である」とは、何を言うものなのか？

先の箇所に続く 508e1-509a5 では、「善のイデア」が「知」と「真理 (*ἀλήθεια*)」の「原因である」、と言われている (cf. e3-4)。これによって何が言われようとしているのであろうと、それは、上のこととは別である。少なくとも、対応のずれは、誰の目にも明らかであらう。——その後の 509b2-10 では、更に、「アナロジーを一步進めて」(cf. a9-10)、「善のイデア」が「存在 (*τὸ εἶναι* τε καὶ ἡ οὐσία)」を、知られる当の事柄に与える (*προσεῖναι*)、つまり、「善のイデア」が「存在」の「原因である」、という話になっている。しかし、これは、「視覚のアナロジー」とは関わりのない話である\*16。

「視覚のアナロジー」が、「原因である」ということと言おうとしていたのは、「太陽」が「光」の「原因である」というそのことであり、その

「光」が、見るものにはよく見せ、見えるものにはよく見えさせる、というそれだけのことである (cf. 508a4-6)。そして、その意味で、「太陽」は「視覚」の「原因である」、「真理」は「知」の「原因である」、とされているのだ。

ここでは、これ以上のことは、何も言われていない。だが、次の二つの箇所<sup>16</sup>に注意を向けて置こう。

(1) 505d5-9 でソクラテスは、多くの人は、正しい (*δικαίον*) とか美しいということについては、本当はそうでなくても、そう思われるもの (*τὰ δοκοῦντα*) の方を選ぶが、よいということについては、誰も (即ち、その人々ですらも) そうはしないで、本当にそうであるもの (*τὰ ὄντα*) の方を求める、このことは明らかではないか、と言っている。——ソクラテスは、「思う」と「知る」の区別が、われわれにとって抜き差しならない問題となるのは、よいということ<sup>17</sup>を巡ってなのだ、ここで問題であるのも、その「知」と「思い」の違いなのだ、と告げているのではないか？そして、その場合に「知る」というのは、「そうであると知る」ということ以外の何であり得ようか？

もしそうだとすれば、「原因である」ということでソクラテスは、(私がそう思っているそのことが、真に)「そうである」ということになるのは、(私や他の誰かによってなどというのではなく、まさに)「真理」によってである、という、当たり前のことを言っているだけなのだ。但し、それは、よいということ<sup>18</sup>を巡ってなのであり、しかも、このとき「真理」は知られる、としているのだ。

(2) ところで、506b2-d1 のソクラテスとアデイマントスは、I 巻11章のソクラテスとトラシュマコス<sup>19</sup>を思い起こさせる\*<sup>17</sup>。そして、ソクラテスはここで、はっきりと、「善そのもの」についての「不知」を、表明している (cf. c2-3)。しかし、c6-9 の4行は、何を言っているのであろうか？ ソクラテスはそこで、(「知」と区別された)「思い」は、その「最上のもの (*αἱ βέλτισται*)」でも「盲目である」、「思いのうちにある人」



が何か真実 ( $\alpha\lambda\eta\theta\acute{\epsilon}\varsigma$  τι) を思い当てたとしても、それは「盲人」が道を正しく ( $\acute{o}\rho\theta\acute{\omega}\varsigma$ ) 歩くのと変わるところがない、と言っている。

「視覚のアナロジー」は、既にここで、はじまっているのか？ だが、仮にそうだとしても、ここには「能力論」の文脈が入り込んでいる、というそのことに注意しなければならない。何故なら、「盲目である」とは視力がないということであり、「盲人」とは視力を持たない人のことだからである。——それにしても、「思い」の「最上のもの」とは何のことか？ 何故、それは「盲目である」と言われるのか？ 何故、その「思い」のうちにある人は「盲人」と変わらなるとされるのか？

### 3. 533b1-c5

VII巻13章のこの箇所では、 $\acute{\upsilon}\pi\alpha\rho\ \xi\eta\nu$  と  $\acute{o}\nu\alpha\rho\ \xi\eta\nu$  の文脈]で、数学は「思い ( $\delta\acute{o}\xi\alpha$ )」に過ぎない、と結論づけている (cf. b8-c1)\*<sup>18</sup>。そして、その理由については、数学の「はじめ ( $\acute{\alpha}\rho\chi\acute{\eta}$ )」が「仮説 ( $\acute{\upsilon}\pi\acute{o}\theta\epsilon\iota\varsigma$ )」である以上、数学の「整合性 ( $\acute{o}\mu\omicron\lambda\omicron\gamma\acute{\iota}\alpha$ )」は「知 ( $\acute{\epsilon}\pi\iota\sigma\tau\acute{\eta}\mu\eta$ )」ではあり得ないのだ、と言っている (cf. c3-5)\*<sup>19</sup>。——人は、通常、数学こそが「知」である、と思い込んでいる。それに対してソクラテスは、「知」ではない、 $\delta\acute{o}\xi\alpha$  である、と言っているのだ。

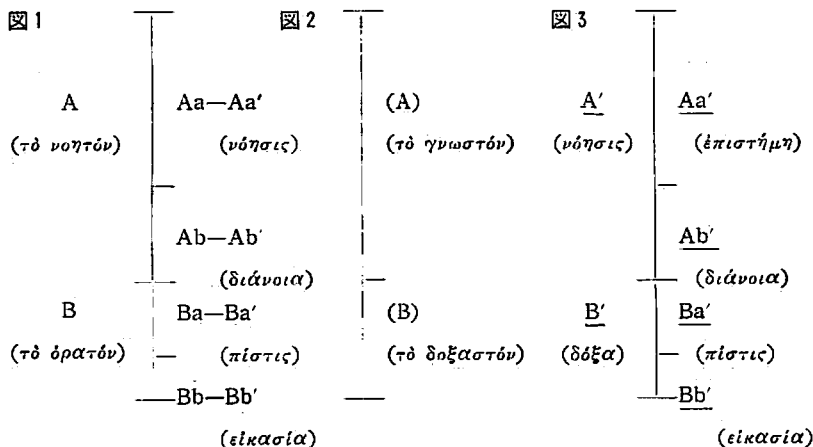
いや、それはおかしい。ソクラテスはその直後で、別のもの、つまり  $\beta'$  を  $\delta\acute{o}\xi\alpha$  と呼んで (cf. p.11図3)、数学の類い ( $\delta\iota\acute{\alpha}\nu\omicron\iota\alpha$ ) を「知 ( $\nu\acute{o}\sigma\iota\varsigma$ )」としているではないか (cf. 534a1-2)。そう反論する人がいるかも知れない。確かに、そう言われているように見える。だが、それに続けて、「知」の「思い」に対する「比 ( $\acute{\alpha}\nu\alpha\lambda\omicron\gamma\acute{\iota}\alpha$ )」のことが言われていること (cf. a2-5)、しかもそこで、故意に、 $\nu\acute{o}\sigma\iota\varsigma$  の二つの項 ( $\acute{\epsilon}\pi\iota\sigma\tau\acute{\eta}\mu\eta$  と  $\delta\iota\acute{\alpha}\nu\omicron\iota\alpha$ ) の間の「比」のことが言い落されていること、そしてその「比」は、言う迄もなく、「知」の「思い」に対するそれと同じであること、これをどう考えるのか\*<sup>20</sup>？

言い落した理由は何か？ それは、ここがもはや「*ὑπὸν ζῆν* と *δυναρ ζῆν* の文脈」にはないからだ。ここは、「能力論」の文脈で、「数学の類い」は「知」である、と言っているのだ。その「数学の類い」については、少し前のところで、「存在のうちの最上のものを見ること」へと「魂のうちの最上のもの」を導くものである、と言われていた\*21。——いや、それは違う。プラトンは、「イデアを知ること」こそが「知」だと言っているのだ。そして、それに対して数学の類いは、その対象が何であれ、*δόξα* ではないが、他方「知」でもない。その間にあるものとして、*διάνοια* だと言っているのだ。今度は、そう人は言うであろう。この場合は確かに、その通りのことが言われている (cf. 533d4-7)。しかし、それは、われわれにとっての話ではないのだ。「洞窟の内」と「外」の違いが、そのことをはっきりと告げている。

その前に、「線分」の或る箇所を見て置こう。

VI巻20章 510a8-10 でソクラテスは、(1) (A) と (B) は、「真理か否かによって (*ἀληθεία τε καὶ μὴ*)」区別され、(2) (A) : (B) は  $Ba : Bb$  である、と言っている (cf. 図 1 と 2)。その前のところでは、 $Ba$  と  $Bb$  は、「明確か不明確かによって (*σαφηνεία καὶ ἀσαφεία*)」区別される、としている (cf. 509d9)。

ところで、 $Aa : Ab$  は  $Ba : Bb$  であり (cf. d6-8)、そして、今、(A) : (B) は  $Ba : Bb$  であると言われたのだから、当然、 $Aa : Ab$  は (A) : (B) である。(2) はこのことを言うためのものであり、ただそれだけのためのものである。そして(1)は、 $Aa$  と  $Ab$  の区別が、*ἀλήθεια* を巡るものであるというそのことを示しているのだ (*σαφηνεία καὶ ἀσαφεία* と *ἀληθεία τε καὶ μὴ* とは、全然別のことである)。——しかし、「線分」の末尾で、「魂の状態 (*παθήματα*)」が、「対象」の「真理 (*ἀλήθεια*)」の度合いに対応する「明確さ」の度合いによって、四つに区別されるとき、話は全く別のものになっている (cf. 511d6-e5)\*22。



別の話になったのは、その直前でグラウコンが、Ab' を「知 (νοῦς)」と「思い」の間に置いたからである (cf. d2-5)。グラウコンは、図1と図2の話を混同したのだ。つまり、グラウコンは、B=(B)としたのであり、それで Aa と B の間に Ab があることになって、それを対象とする Ab' も「知」と「思い」の間に位置付けられることになったのである。——だが、何故、ここで Ab' 等は「魂の状態」とされたのか？ それは、グラウコンが、数学しているその人の（数学しているそのときの）「あり方 (εἶς)」を、διάνοια と呼んだからである (cf. d3-4)\*23。

ところで、「魂の状態」とは、例えば、私がヤマセミの絵を見ているときのその状態のことであり、また、私が本物のヤマセミを見ているときのその状態のことであろう。そして、対象であるヤマセミが本物であるかどうかによって、それを対象としている私のそのときの状態も違って来る、丁度そのように、数学しているときの私の状態と διαλέγεσθαι しているときの私の状態は違う、そうグラウコンは理解したのだ（グラウコンはそう理解したのだと、ソクラテスは、d6-e4 で言っているのである）\*24。

これに対して、ソクラテスが、510b4-511c2 で言っていたのは、全然別のことである。ソクラテスは「方法 (μέθοδος)」の話をしていたのだ (cf.

510b8, c5)<sup>\*25</sup>。即ち、私であれ他の誰であれ、われわれは (511a3-8 の主語は  $\psi\upsilon\chi\acute{\alpha}$  である)、(1) 例えばこの四角形やあの対角線を用いて幾何学しているように、紙とエンピツを使って、現に数学している (cf. 510d5-511a1)<sup>\*26</sup>、また、(2) 幾つかの「仮説 ( $\acute{\upsilon}\pi\acute{o}\theta\epsilon\sigma\iota\varsigma$ )」を立ててそこから出発し、後は整合性を論証するという仕方では、数学せざるを得ない (cf. 510c1-d3)<sup>\*27</sup>。それに対して、私や他の誰かではなく、つまり、われわれではなく、ロゴスそれ自身は (511b3-c2 の主語は  $\alpha\acute{\upsilon}\tau\acute{o}\varsigma\ \acute{o}\ \lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$  である)、(一1) 紙とエンピツを使うこともなく (cf. c1-2)、(一2) 「仮説」を「はじめ ( $\acute{\alpha}\rho\chi\acute{\eta}$ )」とするのでもなく、「仮説」ではない (真の) 「一切のはじめ ( $\acute{\eta}\ \tau\omicron\upsilon\ \pi\alpha\nu\tau\acute{o}\varsigma\ \acute{\alpha}\rho\chi\acute{\eta}$ )」に達する (cf. b5-8)。そうソクラテスは言っているのだ<sup>\*28</sup>。

前者は、間違いなく、われわれの数学の話であり、その方法の話である。では、後者は何なのか？ ——Aa については、「ロゴスそれ自身は  $\delta\iota\alpha\lambda\acute{\epsilon}\gamma\epsilon\sigma\theta\alpha\iota$  の能力によってそれを捉える」と言われている (cf. 511b3-4)。「 $\delta\iota\alpha\lambda\acute{\epsilon}\gamma\epsilon\sigma\theta\alpha\iota$  の能力」とは何か？ それは、どのように位置付けられるものなのか？そして、その能力を持つ者は、どのような者とされるのか？それは、「洞窟」が明らかにしている。

#### 4. 517a8-b6

VII巻3章のこの箇所では、ソクラテスは、「洞窟」を、「前に言われていること」にどう結び付けるべきかを、簡潔に、しかし明快に、語っている。即ち、「視覚を通して明らかになる範囲 ( $\acute{\eta}\ \delta\iota'\acute{o}\psi\epsilon\omega\varsigma\ \phi\alpha\iota\nu\omicron\mu\acute{\epsilon}\nu\eta\ \acute{\epsilon}\delta\omicron\rho\alpha$ )」というのは「洞窟の内」のことであり、その「火 (の光)」は「太陽 (の力)」のことである、と。そして、「洞窟の外」は (図1の) A のことである、そうソクラテスは付け加えて言っている<sup>\*29</sup>。

「視覚を通して明らかになる範囲」とは何か？ それは、(図1の) A に対する B のことではない。それは、「視覚のアナロジー」によって言われ

た。「太陽によってものがよく見える」、というそのことがあり得る、その範囲のことなのだ。そして、それは「洞窟の内」のことだ、と言われている。従って、「視覚のアナロジー」が示そうとしたそのこと、つまり、「*ὑπαρ ἔην* と *ὄναρ ἔην* の文脈」での「知」と「思い」の区別ということとは、「洞窟の内」での話なのだ。それは、「洞窟の内」で「知」と「思い」とが異なる、という話なのであって、「洞窟の内」と「外」とで異なる、という話ではないのである。「洞窟の内」の「火」が「太陽」だとされるそのことが、何よりも端的に、それを示しているのではないか？

しかし、3章のこの箇所は、「洞窟の内」と「外」の区別だけを問題にしている。確かに、それが「洞窟」の一つのポイントだ、というそのことは、間違いではない。だが、どう区別されているのか？

「洞窟の外」とは(図1の)Aのことであると、はっきり言われているのだから、それに対する「内」は、当然、Bのことである、 $B=(B)$ であろうとなかろうと、そう人は考える<sup>\*10</sup>。だが、「洞窟の内」がBのことであると、全くどこにも言われていないのだ<sup>\*11</sup>。言われているのは、「洞窟の内」にある「囚人」は、「思いのうちに生きている」というそのことだけである(cf. 516d7)。つまり、「囚人」とは、われわれ人間の一つの「あり方 (*πάθος, πάθος τε καὶ βίος*)」のことだ、とそう言われているのである(cf. 514a1-2, 515a5, 518b1-2)。これが、「*ὑπαρ ἔην* と *ὄναρ ἔην* の文脈」で言われているのであることは、言うまでもないであろう<sup>\*12</sup>。——それに対して、「洞窟の外」に出て「上のものを見ること」は、その文脈での「思い」に対する「知」を言うものではないのだ。

それが何を言うものであるかは、はっきりしている。それは、「神のものを見ること (*θεῶν θεωρία*)」であって、「人間のもの (*τὰ ἀνθρώπεια*)」をではない、と言われている(cf. 517d4-5)。——「洞窟の内」と「外」の区別は、人間としてあるかそうでないかの区別なのだ<sup>\*13</sup>。

人は、「洞窟の内」では「知」は不可能である、そうプラトンは言っているのだ、と解する。だが、そうではないのだ。グラウコンのように、「能

力論」の枠組みの中でのみ「知」を考え、それ故に、図1と2を混同する、そういう人にとっては、「洞窟の外」に出なければ「知」は不可能である、ということになってしまう、そうプラトンは言っているのである<sup>\*31</sup>。

そして、「διαλέγεσθαι の能力」とは (cf. p. 12)、そのような「知」の「能力」のことなのだ<sup>\*32</sup>。もし、そのような「能力」によって、人は「哲学者」になるのだとしたら、その場合の「哲学」とは、万有についての学であり (cf. 485a10-b9, 486a5-6, 8-9)、「一切のはじめ」「万有の原因」「支配者」についての学である (cf. 511b6-7, 516b9-c2, 517b7-c4)<sup>\*33</sup>。それは、「ソクラテス」の「吟味」というそのこととは、全く無縁のものである<sup>\*34</sup>。それどころか、この私とすら無縁のものなのだ。それは、図式的には、例えば私が、「διαλέγεσθαι の能力」によって ロゴスを通して、つまり、νόησις というそのことによって、対象である αὐτὸ ὃ ἐστὶν ἑκάστων を捉えることだ (cf. 532a5-b2)、と言え言えそうである。しかし、「私が」ではあり得ないのだ。それを捉える、とそう言ってよいのは、「ロゴスそれ自身」としか言いようのない、そういうものだけである<sup>\*35</sup>。

しかし、それにしても、と人は言うであろう。

(1) 517c4-5 でソクラテスは、私的にも公的にも、思慮ある行為をしようとする者は (τὸν μέλλοντα ἐμφρόνως πράξειν)、それ、つまり「善のイデア」、を見なければならぬ、と付け加えている。これは何なのか？

それが何であれ、先ず、それは、「願いとしての思い」(cf. p. 3)の中で、そう付け加えて言われているのだ、というそのことを計算に入れなければならない。次に、その直後で(c8-9)、「洞窟の外」に行った人は、「洞窟の内」に戻ることに、即ち「人間のことを為すこと」を望みはしない、とされていることに関しても、同様である (cf. \*33)。彼がそうする場合、そうするのが自分自身にとってよいと思って、そうするのではない。強制されてそうする、というだけなのだ (cf. 520a8, e2)。何のために？ それは、互いに共通の「利益 (ὠφελία)」のために、と言われよう

(cf. 519e4-520a2)。もし、これが彼の行為の原理であるとしたら、彼が「善そのもの」を知ったということ、そしてそれによって彼が「思慮あるよき生」(cf. 521a4)を送る者になったということは、それとは何の関わりもないことになろう。つまり、「思慮ある」ということと「行為する」ということが、実際には何のつながりもない、ということになってしまうのだ。

(2) しかし、534b8-d1 では、「善のイデア」を定義出来ない人、「善そのもの」を知らない人、そういう人は、「この生を夢と眠りのうちに送り(τὸν νῦν βίον δυνειροπολοῦντα καὶ ὑπνώττοντα)、この世で目を覚ます前に(πρὶν ἐνθάδ' ἐξεγείσθαι)、あの世に行って完全に眠り込んでしまう」(c6-d1)と言われている。だから、「ὑπαρ ζῆν と δναρ ζῆν の文脈」は、それが何であるかは別として、「イデア論」のそれと一つになっているのだ。そう人は言うであろう。

だが、そうではないのだ。確かに、c6-d1 の不定詞句は、その直前の不定詞句(「知」と「思い」の区別のことと言われている)と「そして(καί)」でつながっている。しかも主語は、間違いなく、「そういう人は」(cf. c4 τὸν οὕτως ἔχοντα)である。それ故、ソクラテスがそう言っているということには、疑う余地がない。問題は、そういう人はそうだとしても、では、それに対する「知っている人」はどうなのか、その人のことは「目覚めて生きている人」だと言われているのか、いや、それどころか、そもそもその人のことを「目覚めて生きている人」だと言えるのか、ということである。答えは、言う迄もなく、「否」である。「善そのものの何であるか」をあれこれ思っている人、そういう人こそは、「夢見て生きている人」なのだ。だが、それに対して「善そのものの何であるか」を知っている人、そういう人が「目覚めて生きている人」だ、と言われているのでは、断じてないのだ\*<sup>19</sup>。

(3) だが、それよりも何よりも、数学の類いが「洞窟の外」に位置付けられていることを、どう考えればよいのか？ われわれは、数学すること

に於て、既に「洞窟の外」に出ている、そう言われているのではないのか？ もし、そうだとすれば、「洞窟の内」と「外」の区別を、人間としてあるかそうでないかの区別だとするのは (cf. p. 13), それと矛盾することになる。そう人は言うであろう。

確かに、532b6-d1 で、「これまで述べて来た諸技術を実践すること (*ἡ πραγματεία τῶν τεχνῶν ἃς διήλθομεν*)」は、「洞窟の外」の「影を見る」段階に (と言うべきでないとするは、少くとも、その段階を含むものとして)、はっきりと位置付けられている。しかし、それら「諸技術」は、本当にわれわれの「数学」のことであるのか？

次の箇所が、それを明らかにしている。

## 5. 523a1-525a5

人はこの箇所を、完全に取り違えている。

1. 一体、ここでは、何が問題であるのか？ それについては、この箇所の冒頭部 (523a1-9) で、*νόησις* (一応は、図 1 の Aa'\*\*) へと導くものとそうでないものとを区別するということ、そしてその上で、「この学がそれへと導くものであるかどうかを見ること」である、と言われている。「この学 (*τοῦτο τὸ μάθημα*)」とは、*λογίζεσθαι τε καὶ ἀριθμεῖν δύνασθαι* \*\* のことである (cf. 522e2)。

これがどのようなものとされるかということは、この後で述べられる諸学にも、そのまま当てはまる (cf. \*48)。

2. 次に、「感覚に於てあるもの (*τὰ ἐν ταῖς αἰσθήσεσιν*)」のうち或るものは、感覚によってそれと分るから、調べるために (*εἰς ἐπίσκεψιν*), *νόησις* の助けが要するというものではないものであり、他の或るものは、感覚は当てにならないから、*νόησις* によって調べるということをしなければならない、と言われている (cf. 523a10-b4)。

これは、何を言うものであるのか？ 感覚の対象と *νόησις* の対象とは



別である、ということであろうか？「能力論」の話からすれば、当然、そうなるであろう。だが、*νόσις* は何を「調べる」のか？

その前に、各々どういうもののことが言われているのか、その点をはっきりさせて置くべきである。

3. 523b9-c4 では、「助けが要る」かどうかの違いは、「同時に反対の感覚へと転じてしまう (*ἐκβαίνει εἰς ἐναντίαν αἰσθησιν ἅμα*)」ことのないものであるかどうか、というその違いである、と言われた後で、「助けが要る」場合について、「感覚がこれともその反対とも明らかにしないから」と付け加えられている。そして、それに続けて、真近に見られた場合の「三本の指」の例が出され、「その各々は、指であるという点では、どの指（中指、薬指、小指）であろうと、どんな指（白い、黒い、太い、細い）であろうと、何の違いもない」と言われ、更に、「このような場合、多くの人の魂は、指とは何であるかと、*νόσις* に問うことはない、何故なら、この場合に視覚が、指は指と反対のものである、と告げることはいから」と言われている (cf. c10-d7)。

問題は、例えば、私が目の前に見ているこのものが、「指である」かどうか、というそのことなのだ。そして、それは見れば分ることだ、それが分らない人、そこで「指とは何であるか」と訊かなければならない人、そういう人は普通はいない、とそう言われているのだ。「多くの人の魂は」とは、ここでは、そういう意味である。

4. しかし、それに対して、指の大きい小さい、太い細い、柔らかい固いといったことは、「どの指であろうと、何の違いもない、見たり触れたりすればそれで分る」とは言えないのであって、その場合には、「はじめに固いものに触れていても、次には必ず、柔らかいものに触れることになる、同じものが固くて柔らかい、と告げることになる」と言わなければならない、そうソクラテスは言っているのだ (cf. 523e3-524a5)。

つまり、今、この固いものに触れた私の手が、あの柔らかいものに触れたとして、もしこのものとあのものの区別がついていなかったとしたら、

その場合には、「固いものと告げたこの感覚が、同じものを柔らかいとも言っているとしたら、一体そのものは何なのか」と、私は必ず困惑することになる、と言っているのである (cf. 524a6-10)。——問題は、はっきりしている。「固いもの」とか「柔らかいもの」というのは、このものやあのもののことなのだ。そして、このものやあのものが、この場合には、同時に固くて柔らかいということになるから、私は困惑することになるのだ。

5. では、このような場合に、通常 (cf. 524b3 *εἰκότως*)、人はどうするのか？ 真先にすることは、「λογισμός τε καὶ νόησις を助けに呼んで、(感覚が「固いもの」及び「柔らかいもの」と告げた) 各々のものが、一つのものであるのか、それとも二つのものであるのか、を調べること」である、とそうソクラテスは言っている (cf. 524b3-5)\*12。

「調べる」のは、一つのものであるか二つのものであるか、というそのことである。それには、どうしたらよいか？ 簡単なことであって、「数える」ということをすればよいのだ。一つ、二つと数えさえすれば、同じ一つのものであるか、別の二つのものであるかは、直ぐに分る (cf. b7-c2)。だから、λογισμός τε καὶ νόησις というのは、この場合は、数えるための能力 (disposition) のことでしかないのだ\*13。

6. ところが、それに続く 524c3-d1 は、全く別のことを言っている。即ち、先ず、恰も前を承けるかのように、視覚は大小 (*μέγα καὶ μικρόν*) を区別出来ない、*νόησις* がそれをするのだ、とソクラテスは言う\*14。そして、「こういうところから、大とか小の何であるかという問いが、はじめてわれわれに生じるのではないか」と言った後で、「このようにしてわれわれは、一方を *νοητόν* と呼び、他方を *ὁρατόν* と呼ぶことになったのだ」と言って結んでいる。

ここは、明らかに、「能力」が異なれば対象も異なる、という「能力論」の話になっている。そうなった理由も、既に明らかであろう。それは、ソクラテスが形容詞中性単数の両義性を、意図的に利用して、しかも「視覚

一般は（大小を区別出来ない、それは νόησις の対象である）」としたところから、はじまるのだ。そして、「大とは何であるか」というような、異様な問いが、われわれに生じて来ることになるのは、まさに「こういうところから」、つまり、対象が異なるとする「能力論」の考え方からである、とソクラテスは言っているのだ。

7. 続く 524d2-5 は、524c2 までの、正確なまとめである。直前の c3-d1 のことは、ここでは、全く何も言われていないのだ。

だが、ここでは νόησις ではなくて、διάνοια を助けに呼ぶものとそうでないものがある、とされている (cf. d3)。——それは、結論だけを言えば、「数えることが出来る」とは何なのか、というまさにそのことを告げているのだ。つまり、「数えることが出来る」というそのことというのは、先のところでは、成り行き上 νόησις だと言って来たが<sup>\*15</sup>、正確には διάνοια なのだ、とソクラテスは言っているのである。そして、その διάνοια とは、言う迄もなく、「線分」の「数学」のことである<sup>\*16</sup>。実際、「数えることが出来る」というのは、間違いなく、数学に属す事柄であらう。

8. それに対して、524d7-525a5 は、ここもまた、全く別のことを言っているのだ。ここは、524c2 までの話を骨抜きにした上で、それを c3-d1 の「能力論」の話の中に、強引に押し込める、ということをしているのだ。「骨抜きにして」「強引に」というのは、「（一が見られるときには）常に、それと同時に何かそれと反対のもの（これは一体、何のことなのか？）が見られるので、一であるともその反対であるとも、明らかにならない」（cf. e2-3）と言っている、まさにそのことがそうなのである<sup>\*17</sup>。言われていることは、「一」を除けば、524c2 までのことである。しかし、「一」が、あの場合の「感覚に於てあるもの」のうちに入って来るなどということとは、絶対にあり得ないのだ。

ところで、その後に続けて、「(1) そうであれば、それを決するものが必要である、(2) 即ち、この場合魂は、自分自身の内で (ἐν ἑαυτῇ), ἐννοια

を働かせ、一とは何であるかを問い求めることをしなければならない、(3) このようにして、一について学ぶことは、存在を見ることへと (*ἐπὶ τὴν τοῦ ὄντος θέαν*) 向きを変えさせ、導くのである」と言われている (524e4-525a2)。

(1) 「それを決する」とは、「これが一それ自体である」「一の何であるかというそのことというのはこれなのだ」と決することである。しかし、誰が、それをするというのか？ 私や、私と同じような他の誰か、ではあり得ない。

(2) 誰がするのであれ、「能力論」の描きからすれば、それは、「その者自身の内で」、その者の持つ「或る能力」によって、なされるのでなければならない。だが、私や私と同じような他の誰かの場合には、それは、私やその人にはそう思われる、というそれだけのことでしかない。——「能力論」はここで、決定的に行き詰まることになるのだ。

それにしても、何故、*νόησις* ではなくて、*ἐννοια* と言われたのか？ その理由も、既に明白であろう。私や私と同じような他の誰かが問題である限りでは、「*νόησις* によって」とは、決して言えないからなのだ。「私は *νόησις* によってそうしたのだ」と、一体誰が言えるというのか？

(3) それ故、「そのような仕方で（一だけでなく、一般に）数について学ぶこと」が *λογιστική τε καὶ ἀριθμητική* だとしたら (cf. 525a9), それは、われわれの「数学」とは全く無縁のものだ、と言わなければならない。——それが「洞窟の外」に位置付けられるのは、極めて当然のことなのだ。

更に、そういう「学」が、「存在を見ることへと向きを変えさせ、導く」と言われている\*49。だが、「向きを変えさせ、導く」とは、「見る」「触れる」ということではないのだ。「見る」「触れる」と言えるのは、「*νόησις* そのものによって」と言える、そのときだけである (cf. 525c2-3, 526b1-3)。しかし、どうすれば、そう言えるのか？ それは、私や私と同じような他の誰かには、断じて言えることではないのだ。——そういう「学」は

「影を見る」のでしかない、と言われるのは、このためである。

（結語）「能力論」から「真理」への道は、完全に閉ざされている。だが、ソクラテスは、「真理」は知られる、と言った（cf. p.7）。それは、繰り返す迄もなく、「*ὑπαρ ξῆν* と *ὄναρ ξῆν* の文脈」で、そう言われたのだ。実際、知られないというのであれば、*ὑπαρ ξῆν* と *ὄναρ ξῆν* の区別それ自体が、意味のないものになってしまうであろう。

では、どこで、どのようにして、それは知られるのか？

今ここで、それは知られる、そうソクラテスは言っているのだ。「知によって生きる（*ὑπαρ ξῆν*）」とは、「今ここで、私が知によって生きる」ということなのだ。しかし、その「知」とは、「数える」というようなことがそうだ、と言っているのではない。「数える」というようなことというのは、「*ὑπαρ ξῆν* と *ὄναρ ξῆν* の文脈」からすれば、やはり *δόξα* でしかないのだ。——ソクラテスが言っているのは、「私自身にとってよいというそのことを知ること」、それがそうだ、ということである。

どのようにして、或は、何故、この場合は「知る」と言えるのか？——『国家』X巻6章 604a10-d11 で、この場合に「ロゴス」と「ノモス」がどうあるか、が言われている。それが、ソクラテスの答えである\*19。

## 註

（テキストは、\*20で指摘した箇所を除いて、J. Burnet, *Platonis Opera*, Oxford に従う）

- \* 1 ソクラテスが主役でない『ソピステース』等の対話篇については、ここでは、次のことだけを言って置く。——ソクラテスが主役でないということには、はっきりとした理由がある。しかし、その理由というのは、「ソクラテス」に関してプラトンの考えが変わった、というようなことではない。
- \* 2 *εἰρωνεία* と *ἐλεγχος*（結局は、G. Vlastos, *The Socratic Elenchus*, in J. Annas ed., *Oxford Studies in Ancient Philosophy* I, Oxford, 1983 の言う standard elenchus も）とは、プラトンのではなく、他の多くの人のソクラテス像に関わるものでしかないのだ。——とりわけ、『国家』I巻11章のトラシェ

マコス、そのことをよく示していよう (cf. 337a4-7, e1-3)。

- \* 3 『国家』Ⅰ巻11章 337e4-338a1, 『弁明』21d2-7, 22d6-8 等を見よ。——「そのこと」という限定が重要である (周知のように、『弁明』では, *καλὸν κἀγαθόν, τὰλλα τὰ μέγιστα* と言われていた)。——これについては, 更に, 加藤信朗「知と不知への関わり」『理想』601, 1983 を見よ。

しかし, ソクラテスは、『国家』のこの箇所でも, VI巻18章 505a5-6 でも, また『テアイテトス』150c5-d2 でも, 正式の言い方をしていない。

- \* 4 『国家』Ⅰ巻11章 337c3-6, 20章 349a4-8, とりわけ『ゴルギアス』495a7-9, 等を見よ。

以上のように『国家』Ⅰ巻11章は, ソクラテスの「方法」が, 意図的に簡略化された形で想起されている, という点で重要である。

- \* 5 『弁明』22e6 を見よ (『テアイテトス』210c2 も同じ)。——「思い」がこのようなものであることについては, 神崎繁「知と不知の間」『哲学雑誌』767, 1980, p.136 を見よ。

- \* 6 『弁明』28e5-6を見よ。*ἐξέτασις* と *ἐλεγχος, βάσανος* とは, 厳密に区別されなければならない (*βάσανος* については, 更に, \*37を見よ)。

- \* 7 509c3-4 にも, 同様の表明がある。

- \* 8 しかし, 同じ d5-6 で, *διάνοια* の違いと言われたとき, もう既に, 別の話になりつつある。

- \* 9 これらも議論の前提である。

誤まり得るかどうかというそのことは (cf. 477e6-7), 「仕事」の違いを言うものである。従って, それは「能力論」の枠の中での話である。——この点については, 更に, Ⅰ巻14章 340d5-e6 のトラシュマコス, その所謂「厳密論 (*ακριβὲς λόγος*)」を見よ。その限りでの「能力」としての「知」と「思い」の違いは, 「専門家」とそうでない人の違いと, 完全に重なり合う。この場合の「知」のモデルは, 言う迄もなく, 「諸技術 (*τέχναι*)」である (cf. 346a1-3, d5-6)。

「能力論」の問題は, 「知」を「諸技術」のところでのみ考える, その考え方の問題なのだ。これについては, 松永雄二「「知」と「不知」とをめぐる問題」九州大学哲学会『哲学論文集』11, 1975 を見よ。

- \* 10 これも前提の一つである。「知」が knowledge by acquaintance of a thing だというのは, この前提の下で, そして「能力論」の枠の中で, そうだということだけのことである。——但し, 「前提である」とは, *τὸ ὄν*=イデア がはじめてから前提されているということではない。これを「知」の形式的な定義の一部とするというそのことが, そうなのだ。

人は, プラトンの議論を救おうとして, *τὸ ὄν* を様々な解釈しようとする (そうした試みの中では, 特に, G. Fine, Knowledge and Belief in *Republic V*,

*Archiv für Geschichte der Philosophie* 60, 1978 を見よ)。しかし、大前提である「能力論」の枠を勝手に取り払ってしまうのであれば、そしてその上で、ここだけを読むのであれば、どうしても読めてしまうのだ。

τὸ ὄν については、更に、\*12を見よ。

- \*11 これが前提の一つであることは、明らかではないか？

「明確か不明確か」というのは、結局は、対象の現われ方の問題である (cf. 479c7-d1)。つまり、「対象——（それを対象としているそのときの）魂の状態」という図式の下で、或るときは「対象」について、また或るときは「魂の状態」について、「明確」とか「不明確」と言われるのだ。これについては、更に、\*22を見よ。

- \*12 一方に「美そのもの（イデア）」があり、他方に「多くの美しいもの」があるとしても、前提の一つでしかない。そして、既に、この議論の冒頭、475e3-476c1 で、「能力論」とは無関係に導入されていたそのことが、478e7 以下で「能力論」と織り合わされることによって、そこではじめて、「あるもの（τὸ ὄν）」が「イデア」を意味することになるのである（この点は、Fine の「悪戦苦闘」を見れば、より一層明らかとなろう）。

- \*13 d7 τὸ γιγνόμενόν τε καὶ ἀπολλύμενον は、d4 ἀλήθειά τε καὶ τὸ ὄν に対して言われている。しかし、両者は対応し合っていない。意図的に、ずらされている。ここは、対象が違うという話ではないのだ。

- \*14 この点は、507d11-e2 で、はっきりと告げられている。

- \*15 508b12 ταῦτον は、b9-10 の ὁ ἅλος を指す。——そこで、それは「視覚の原因であり、そしてそれ自身も見られる」と言われている。

- \*16 関わりがないということを、ソクラテスは明示している (cf. b3-4)。

- \*17 アダイマントスのソクラテス像は、トラシュマコスのそれと、何ら変わるところがない。また、この点でグラウコンは別だ、とする根拠もない (d2-5 のグラウコンは、IV 巻末尾との連関で重要であるが、今は触れない)。

- \*18 「ὅσαρ ἔστιν と ὄσαρ ἔστιν の文脈」でそう言われているのだ、という点に注意しなければならない。

533a1-4 でソクラテスは、「グラウコン、君はついて来ることが出来ないだろうが、これから君は、われわれが言っていることの真実そのもの (ἀντὶ τὸ ἀληθές) を見ることになるのだ」と言っている。「われわれが言っていること」とは何か？ その「真実」とは何か？ グ라우コンは「能力論」の枠の中でのみ考えている (a8-10 はそのことを示す)。しかし、b8-c1 と、534c6-d1 (cf. p. 15) は、その文脈にはない。

- \*19 このことは、「線分」のところで、既に示唆されていた (cf. 510c1-d3)。

- \*20 533e7 に「前と同じように (ὡς περ τὸ πρότερον)」とあるが、言われている

ことは、明らかに前とは別である（それ故、用語が変わっていることには、意味があるのだ）。——「線分」では、後に見るように、 $Aa' : Ba' , Ab' : Bb'$  というのは、問題ではなかった。それに対して、ここでことさら、 $A' : B'$  は  $Ab' : Bb'$  である、と言っているのは、533b1-c5 とは別の文脈で、「数学の類い」は「思い」に対する「知」である、と言うためである（これについては、p.16以降を見よ）。

では、何故、「前と同じように」と言われたのか？ それは、グラウコンが「だが、(διάνοια は) 明確さという点での魂の或るあり方のことを指す、ということだけははっきりしている」と言ったからである（テキストは、写本通りに、533e3 οὐ γὰρ οὖν, ἔφη· の後にすぐ続けて、ἀλλ' ἂν μόνον δηλοῖ πρός τὴν ἐξιν σαφήνειαν λέγει ἐν ψυχῇ. と読んで、〈ἀρκέσει ; ναί.〉は読まない）。つまり、ソクラテスは 533e7-534a1で、「君がそう言うなら、511d6-e4 と同じように、それは魂の状態のことだとして、それを、διάνοια と呼ぶことにしよう」と言っているのだ。

ところで、534a5-7 では、更に、各々の対象の間の「比」については、言及を避ける旨のことが言われている。何故、避けるのか？ それは、「線分」の場合とは組合せが違う、そして描かれた線分の意味も違う、二項の間の「比」が、ここでは問題だからであり（「線分」では、 $Aa : Ab , Ba : Bb , (A) : (B)$  のことだけが言われていた）、しかも、その「比」は、οὐσία 対 γένεσις の「比」と同じだ。と言わなければならないからである（οὐσία 対 γένεσις は、「能力論」の文脈での「洞窟の外」と「内」の区別を言うものである、cf. 521d3-4, 525b5-6, c5-6, 526e6-7）。

\* 21 532c3-6 を見よ。この箇所は重要である。「能力論」が「魂部分説」と、真直ぐにつながるものであることを、明言しているからだ。

\* 22 人は、この 511d6-e5 から後向きに読んで、図1と2の違いは無視してよい、と決めつけてしまう（例外は、J. L. Austin, *The Line and the Cave in Plato's Republic*, in his *Philosophical Papers* 3rd ed., Oxford, 1978）。そして、更に、A. S. Ferguson, *Plato's Simile of Light*, Part I, *Classical Quarterly* XV, 1921 の注意を無視して、 $Aa : Ab$  のことを言うために  $Ba : Bb$  と  $(A) : (B)$  のことが言われているのだ、とすることでは満足せず、何かそれ以上の「教え」を「線分」から引き出そうとする（この点は、Austin も例外ではない）。

だが、511c2 までの話とここの話とは、全く別なのだ。——ここは、「もの（対象）」を四つの領域に分けた上で、その区別に対応させて、「（それを対象としているそのときの）魂の状態」を四つに分けているのだ（ $Ab : Ba$  は、ここでは、 $Aa : Ab$ 、及び  $Ba : Bb$  に等しく、 $A : B$  は一切問題ではない、cf. 511e2 καὶ



τάξον αὐτὰ ἀνὰ λόγον)。つまり、後者は前者を当てにしている、ということなのである。実際、そうでなければ、「明確か不明確か」をそれ自体として、しかも私の意識がどうあるかというそのことに於て、測るなどということが出来るはずはないのだ。

- \* 23 ソクラテスは、そう言ったのではない。数学者がそれについて数学しているそのものは、目に見えるこの四角形やあの対角線といったものではない、それは「διάνοια によってしか見えない」、つまり、われわれが数学するというそのことによってのみあるものだ、と言ったのである (cf. 510d5-511a1)。

グラウコンはそれを、先ず「能力論」の話にして (cf. 511c7-8)、その上に、更に「対象——(それを対象としているそのときの) 魂の状態」という図式をかぶせたのである。この図式は、「能力論」の「対象が違う」という話と、余りによく合う (それ故、R. C. Cross and A. D. Woozley, *Plato's Republic* London, 1964 がそうであるように、多くの人が「能力」と「状態」とを区別しない)。

それだけではない。人は、*ὑπαρ* ζῆν と *δυναρ* ζῆν の区別をも、この図式の下で、「魂の状態」のそれと解してしまう。その結果、「*ὑπαρ* ζῆν と *δυναρ* ζῆν の文脈」は、決定的に見失われることになるのだ (例えば D. Gallop, *Dreaming and Waking in Plato*, in J. P. Anton and G. L. Kustas eds., *Essays in Ancient Greek Philosophy*, New York, 1972 を見よ)。

- \* 24 それに対して、533d4-7 の *διάνοια* は、他のものが何であれ、これだけは *τέχνη* のことであると、はっきり言われている。それ故に、そこでは「数学の類い」を *διάνοια* としてよいのだ (cf. p. 9)。

- \* 25 更に、533b3, c7 を見よ。

510b4-511c2 が「方法」の話であるということは、言い換えれば、「線分」のこの箇所は、本来は「能力論」の文脈にはない、ということである (しかし、実際は、この後見るように、ここには「能力論」の文脈が入り込んでいる)。

- \* 26 このことは、われわれの数学の方法上の a defect として言われているのではない。ソクラテスは 533b1-c5 で、このことには一言も触れていない。——それが a defect だということになるのは、「知」の「直接性」を主張する場合だけである (これについては、更に、\* 38 を見よ)。

また、「この四角形やあの対角線を (補助的に) 合わせ用いる (*προσχωρῶνται*)」ということと、「それらを (四角形そのものや対角線そのものの) 像として用いる (*ὡς εἰκόσιν χρώμενοι*)」ということとは、全く別のことである。前者は「任意の図形を用いる」ということであるが、後者はそれを「能力論」の枠の中で解説したものなのである。

- \* 27 510b5 *ἀναγκάζεται*, 511a4 *ἀναγκαζομένην* を見よ。

「仮説」の位置付けについては、c6 *ὡς εἰδότες*, c6-d1 *οὐδένα λόγον διδόναι*

ὥς παντὶ φανερώων を見よ。また、『パイドン』100a3-7（とりわけ、この一文の主語が、一人称単数であること）を見よ。——「仮説」による「方法」を、如何なる意味に於てであれ、プラトンのそれとしてはならない。『パイドン』のこの前後の箇所は、それがどのように位置付けられるべきかを、明白に告げている。

ところで、『国家』のこの箇所では、「仮説」の例として、proposition ではなく、「奇数」「偶数」といったものだけが言われているが（cf. c3-5）、それは、「能力論」の文脈に於てのことであって、それ以上のことをここから引き出すとしても、それには何の根拠もないのだ。

- \* 28 ところで、510b4-9では、Aa と Ab どちらの場合も、主語はψυχῇ である。しかし、その後でもう一度言い直されたときに（cf. 510c1 ἀλλὰ αὐθις）、主語が変えられたというそのことが、決定的に重要なのだ（511a3-8 の繰返しは、511b3-c2 に対して主語が違うというそのことだけを言っている）。
- \* 29 図1のAとは、509d2, 4 で言われているそのことであり、また、「太陽」の508c1 で言われているそのことでもある。但し、先に見たグラウコンの混同によって、A=(A) であるが（cf. 517b8 ἐν τῷ γνωστῷ）。——この517b4-5の「付け加え」については、「もしそうとらねば、それは、私の願いに関しては誤っていないというだけのことだ」とソクラテスは言っている、そう解すべきである（「願い」については、cf. p.3）。

つまり、「どう結び付けるべきか」を言っているのは、厳密には、a8-b4 だけなのだ（この点、及び「前に言われていること」、についての R. Robinson, *Plato's earlier Dialectic* 2nd ed., Oxford, 1953の指摘は正しい）。

ところで、ここで「光」に比せられる「力（δύναμις）」というのは、「能力論」とは無関係である。そして、ここで重要なのは、b3 の「火」が「視覚のアナロジー」の「太陽」のことである、というそのことの方である。

- \* 30 517c3 ἐν ὁρατῷ をBへの言及とし、508c2 ἐν τῷ ὁρατῷと重ね合わせるとき、「二世界説」の描きが必至のものとなって来る。
- \* 31 「囚人」にその影が見せられる元のものも、B であるとは言われていない。それは、「人工物」だ。と言われているのだ（cf. 515a1 εἰργασμένα）。
- \* 32 514a1-2 ἀπείκασον τοιούτῳ πάθει τὴν ἡμετέραν φύσιν. 515a5 ὁμοίους ἡμῖν についての示唆に富む記述が、小池澄夫「プラトン」『岩波新講座哲学』14, 1985にある。

ところで、518b1-2 で、「魂」の「幸福」を巡って区別されている二つの生の「あり方」のうち、一方は「囚人」のそれであるとしても、他方は何を指すものなのか？ それは、問題なく、a6-7 で「より明るい生から（ἐκ φανότερου βίου）」と言われている、その生を指す。だが、ἐκ φανότερου βίου を b4 ἄνωθεν ἐκ

φωτός と重ね合わせて（このこと自体に問題はない）、更にその上に、516e5-6 *ἐκ τοῦ ἡλίου* を重ね合わせて。しかも、「ὕπαρ ξῆν と ὄναρ ξῆν の文脈」を一切無視して、それは「洞窟の外」で「時を過ごすこと」である、としてはならない。

518a1-b4 は、(517a2-6 と違って)「ὕπαρ ξῆν と ὄναρ ξῆν の文脈」で、「囚人」の生に対して「ソクラテス」のそれを語っているのだ（518a1-b4 が、第三者のソクラテス像を述べているに過ぎない 517a2-6 とは別の文脈にあるということは、518a1 *εἰ νοῦν γε ἔχου τις* がはっきりと告げている——但し、*νοῦν ἔχειν* は、ここでは「多くの人々」との違いを告げているだけである）。

要するに、518b4 の φώς とは、517b3 のそれのことであり、「視覚のアナロジー」の「太陽」の「光」のことなのである（cf. 514b2 φώς—ἄνωθεν）。

- \* 33 「洞窟の外」に行った者は、「人間のことを為すこと（τὰ τῶν ἀνθρώπων πράττειν）」は望まない、その「魂」は、常に、「上で時を過ごすこと」を熱望する、と言われている（cf. 517c8-9）。τὰ τῶν ἀνθρώπων πράττειν と ἄνω διατρίβειν の対照を見よ。「洞窟の内」に戻ることは、直ちに、「人間のことを為すこと」を意味するのだ。

ここで「魂」と言われているものがどのようなものであるかについては、518b6-519b6 を見よ。更に、\* 34 を見よ。

また、b6-7 *θεός δέ που οἶδεν εἰ ἀληθῆς οὐσα τυγχάνει* は、単なる修辭的付け加えではない。

- \* 34 しかも、そういう人にとっては、「内」から「外」へどうやって出るのが、というそのことも、それ程困難な問題ではないのだ。何故なら、そのような「知」の「能力」と「器官（ὄργανον）」（これは、518e2-3 で、*ἡ τοῦ φρονήσαι ἀρετή* と言い換えられた上で、*παντός μᾶλλον θειοτέρου τινός τυγχάνει* と言われている）とは「魂」に備わっているものである（cf. 518c4-6）。しかし、正しく（ὀρθῶς）「見るべきもの」（本来の対象）に向ってはいないから、そのものの方へと向きを変えてやらなければならない、そのための「技術（τέχνη）」が「教育」である（cf. d3-8）、そう言えば十分だからである。——所謂「魂の向け変えとしての教育」というのは、「能力論」の虚構の上に描かれた、一つの夢に過ぎないのだ（c4 *ὁ νῦν λόγος* が何を指すかは、既に明白であろう）。

- \* 35 そのような「知」の「能力」のことである、とプラトンは言っている（cf. 531e4-532b3, 533a8-11）。

- \* 36 何故、「原因である」「支配者である」ということについては、*συλλογίζοιτο* (516b9), *συλλογιστέα* (517c1) と言われているのか？ その理由は、それが「知」の直接的な対象ではないから、というそれだけのことである。

また、そのような「哲学者」にとっては、人間の生は重大な問題ではない、と

言われていることも (cf. 486a9-10), 見逃してはならない。

- \* 37 διαλέγεσθαι と共に言われているのは、537d5-7を除けば、ἐλεγχος のことだけである (cf. 534b8-c5. 538d6-e2)。

537d5-7 では、エリート の選別 に関して、τῇ τοῦ διαλέγεσθαι δυνάμει βασιανίζοντα と 言われている。βασανίζειν とは、本物が偽物か、それを見分けられる者が、見分ける、ということである (cf. 『ゴルギアス』 486d2-488b1)。——『テアイテトス』 150c1 の用法も同じである。所謂「産婆術」というのは、厳密な意味で、「ソクラテス」の「方法」を言い表わすものでは、決してないのだ (cf. c1 ἡμετέρας)。

- \* 38 532a5 τις は、結局は、「誰か或る人」ではあり得ないのだ。

また、「ロゴスを通して」は、511c1-2 で εἶδεσιν αὐτοῖς δι' αὐτῶν εἰς αὐτά と 言われていたそのことと同じである。これらは、任意の図形を用いるという、われわれの数学の方法に対して言われている。

そして、ここで「ロゴス」とは、各々のものの何であるかというそのことについてのそれである (cf. 534b3-4)。そのロゴスそれ自身がそれ自身によってそれ自身を通してそれ自身を捉える、それが「知」である、とそう言われているのだ。——このような「知」の「直接性」の構図もまた、「能力論」から来るものであることは、言うまでもないことであろう。

- \* 39 と ころで、520c6-7 には、καὶ οὕτω ὅπαρ ἡμῖν καὶ ὑμῖν ἡ πόλις οἰκῆσεται ἀλλ' οὐκ ὄναρ とある。しかし、これは、「善そのものの何であるか」を知った「哲人支配者」こそが国を「目覚めて」治めるのだ、と言っているのではない。καὶ οὕτω は、専ら、「美しいもの (καλῶν) 正しいもの (δικαίων) よいもの (ἀγαθῶν) の真実 (τἀληθῆ) を知ることによって」(cf. c5-6)、ということなのだ。つまり、「目覚めて」というそのことは、「洞窟の内」で、一般に「美しい」「正しい」「よい」と言われるものの真実を知ること、その正体を見極めること、これ以外ではない、と言っているのだ。

- \* 40 「一応は」と言わなければならない理由については、p. 18を見よ。

- \* 41 これが何を意味するかについては、\* 43、及び p. 20を見よ。

- \* 42 この一文の主語は ψυχὴ である。b10-c1 についても同様である。従って、「別の二つのものである」とか「同じ一つのものである」と考える (νοήσκει, ἐνέει) のは、「魂」である。この点は、c3-4 及び c6-8 との対比に於て、重要である (cf. \* 44)。

- \* 43 522e2 λογίζεσθαι τε καὶ ἀριθμεῖν δύνασθαι の一つの (そして、本来の) 意味は、「数えることが出来る」ということである。——これについては、更に、522c1-9 を見よ。そこでは、誰もが最初に学習しなければならないこととして、一つ、二つ、三つと数えること (ἀριθμός τε καὶ λογισμός) がある、と言われ

ている。

そして、この意味での「数学」(それは、間違いなく、われわれの数学である)のことを、ソクラテスは 533b8-c1 に於て、「ὑπαρ ἔστιν と ὁυαρ ἔστιν の文脈」で、「知」ではない、δῶξα である、と言っているのだ。

- \* 44 c3-4 (この一文に、「このような場合には」という限定はない)の主語は ὁψις であり、c6-8 の主語は νόσις であることに、注意しなければならない。
- \* 45 直接的には 523b9-c2 を指している、d3-5 の節の中では、νόσις が使われている。

「成り行き上」というのは、表向きは「能力論」の話なので、そこから用語を借用して、ということである。

- \* 46 但し、グラウコンの理解したそれ (cf. p. 11) ではなく、ソクラテスの言ったそれである (cf. \* 23)。
- \* 47 e2-3 の補った部分の主語は、「一つのものが」ではなくて、「一が」である。何故なら、524c3-d1 と同様、ここは「対象が違う」という話だからである (cf. d10 αὐτὸ καθ'αὐτό)。

また、524a3-5 のグラウコンが、「このものやあのものは、一つのものとも無限に多くのものとも、見られる」と言っているのは、「対象が違う」という話だからこそ、正しいということになるのだ。

- \* 48 「存在を見ることへと導く」(cf. 525a1) という言い方は、当然、「νόσις へと導く」という言い方と等価である。

他の諸「学」についても、同様の言い方がされている(この点については、とりわけ 526d7-e8 を見よ)。

- \* 49 X巻のこの箇所をどう読むかについては、岡部勉「プラトン『国家』——或る仮説」熊本大学文学会『文学部論叢』10、1983 を見よ。

しかし、「ソクラテスの答え」については、未だ、その見取図が描けたに過ぎない。

(後記) この論文の最初の草稿は、1983年6月末の日付けを持つ。本論稿は、\* 32の一部を変更したのと誤記の訂正を除けば、1985年11月のワープロ草稿第2版と特に変わりはない。

各々の草稿段階で、この狂気にも等しい試みに対して、真剣に応じてくれた多くの方々に感謝する。